（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　山田　忠彰

本論文は、倫理学と美学という、異なる学問領域を織り合わせて、人間のあり方としての倫理と、特に芸術に現れた美とを、統合する野心的な試みである。

序章では、倫理学と美学の言葉の重なりの意味するところが、イタリア語の Estetica の分析に出発して、概括的に点描される。

第一章、二章、三章は、〈デザイン・ワールド〉の基本を描出する。まずデザインとは、記号の外化・表出による意味形成として捉えられる。この形成の営為を通して、世界が有意味なものとして確定的にたち現れると同時に、デザイナー（作者）としての人間の姿も、その輪郭を明確にされうることが論ぜられる。続いて、他者との相互的・間テクスト的な「演奏」（解釈）関係において、〈私〉の存在スタイルが、〈私〉の「形成の様式」として明らかになると言われる。こうした自他のコミュニケーションによって現出する〈デザイン・ワールド〉全体が、記号とその解釈項が連鎖するテクストとみなされる。その際、ヘーゲルの主観的精神論（人間学）と客観的精神論（抽象法・市民社会）の再構成を通して、このデザイン的形象の基礎的次元が描出されるのである。

第四章、五章、六章では、こうした基本的デザインによる〈デザイン・ワールド〉の存在性格とそこにおける〈美〉のあり様に関する本論文のスタンスに、更なる思想史的裏打ちが与えられる。まずヘーゲル美学の人間存在論化の試みから出発し、ニーチェとその思想圏と交差するゲーテを援用して、〈デザイン・ワールド〉論の思想史的権利づけが試みられ、更にフィードラー、ニーチェ、クローチェの議論が参照されつつ、この〈美〉の性格の討究がなされる。

以上の討究を踏まえて、第七章、八章、九章では、エステティズモとそこから〈ネオ・エステティズモ〉へと移行せざるをえない所以が論じられる。まずシュライエルマッハー美学に対するクローチェの批判的対決が取り上げられ、続いて、歴史的エステティズモの特質と問題点、および継承されるべき点の解明がなされる。それらを踏まえて、〈私〉の〈存在美〉の間‐主観的倫理性が論じられるのである。

第十章は、本論文のこれまでの展開を、心理学や脳科学からの知見（アフォーダンス論、ミラーニューロン論等）をも加味しつつ、総括的に再構成し、「美しくあること」の「表現性」の存在論における他者性の契機（他者の促し）への更なる注目から、〈存在美〉＝〈倫理美〉となる所以が、更には〈ネオ・エステティズモ〉＝倫理的〈エステティズモ〉となる所以が、カント、シラーの所説の批判的検討を踏まえて、考察されるのである。

本論文は、筆者の構想する〈エスト‐エティカ〉の、十全な体系的構築と具体的な展開には、未だ至っていない憾みは残すが、この方向が現代における倫理学研究の一定位たりうる、その権利づけについては、多岐にわたる思想史的な検討を経て周到に論じ尽くしている。

それゆえ本審査委員会は、この論文が博士（文学）の授与に値するとの結論に達した。